

【宮腰英一会員追悼】

宮腰英一先生にとっての英国教育研究と本学会

吉原 美那子

(高崎経済大学)

東北大学名誉教授の宮腰英一会員は、本学会の運営に長年関わってこられた功労者のお一人である。そのお人柄を一言で表わすと、無類の英国好きである。政治システム、食文化、美術作品、古典文学、ポップカルチャー、服飾からあらゆる公共交通機関まで。英国のありとあらゆるものを慈しみ、無批判に受け入れ楽しんでおられた。ただし、教育だけは異なり、教育の様相は鋭角的に観察されていた。研究者として当然ではあるが、本質を捉える姿勢を常に自ら課し、いかなる事象も客観的建設的に議論することを重んじた。教育だけでなく多分野から視野も含めて議論することを使命とされていた。さらに、来るもの拒まず、来なければ自ら行くのをモットーに、研究視野の無限の広がり常に期待と希望を持たれた方であったと言えよう。

宮腰会員は、本学会の前身、日英教育フォーラムの発足時から本学会に入会、さらに運営委員会の運営委員を長年務められてきた。英国の教育を様々な側面からアプローチする仲間が集う本学会は、宮腰会員にとってとりわけ刺激的で大変意味深い学会であったと思われ、かつ毎年の研究大会にも足しげく通われ、学会自体をととても楽しんでこられていた。本学会で出会われた研究者の方々と長年にわたるお付き合いは、宮腰会員にとってどれだけの宝となったのかは測り知れない。このような宮腰会員のこれまでの英国教育研究と日英教育学会との関わりを振り返りながら、一教え子であった小生が、僭越ながら常日頃から語っていた英国教育研究の面白さを紐解いていきたい。以降は、宮腰会員を先生と呼びする。

先生によると、英国教育研究の面白さ、それは英国教育に内包する「公」と「私」、それらがそれぞれを跨ぐ不明瞭さである。教育の公私二元論は重鎮によって長年にわたり議論されてきたが、英国のそれは、日本はもとより諸国と比べても特有である。その特有性は、英国の歴史や哲学を深層まで探らないと理解できないのかもしれない。そのマインドを共有し存分に語り合えることのできる場、それこそが日英教育学会なのであろう。

そもそも先生の研究の出発点は、英国の中等教育史であった。故松井一磨名誉教授の指導のもと、東北大学院生のころから19世紀の中等教育の概念形成や学校の設置形態、法整備の過程の研究を研鑽されてきた。英国の中等教育は、社会階層を反映させつつ教育需要を様々な設置形態

によって取り込んできたため、その複雑性を分析するにあたり様々なアプローチがある。その中で先生が着目したのが、「基金立文法学校」とそれを支える「チャリティ」の理念である。基金立文法学校は、本来なら「独立セクター（私立セクター）」として分類されるのであったが、「チャリティ」によって公益性の実現と自律性の維持という両義的性格をもち、今日の英国特有の学校制度を生み出し、中流階級の中等教育の受け皿として発展していった。その現象は、「公」と「私」、それらがそれぞれを跨ぐ不明瞭さをまさに表しながらも、市民的公共性の拡がりとも受け取れる点で、確かに面白い。これらの研究の集大成として出版したのが、『十九世紀英国の基金立文法学校——チャリティの伝統と変容』（創文社、2000年）である。

この著作は、若手のころから約20年間、資料収集を積み重ねられ論文として執筆してきたものを纏められたものである。この研究を進める中で、ターニングポイントとなったのが、1993年、ロンドン大学教育学研究院（IoE）での在外研究であろう。当時、英国教育史学会の重鎮だったリチャード・オールドリッチ教授から、史料というものの見方や捉え方、歴史からみる教育改革の功罪を丁寧かつ鋭角にご教授いただいたという経験は、何にも代えがたいものだったと伺っている。このロンドン滞在は、オールドリッチ教授だけでなく、ゲーリー・マッカラク教授やアンディ・グリーン教授、ジェフ・ウィッティ教授など、IoEに在籍されていた多くの英国研究者との交流の契機ともなり、そのつながりは長年続いた。実はこの滞在代に、後の第73代首相となるトニー・ブレア氏にもお会いされている。偶然のそれも短時間の面会であったそうだが、その時の出来事を興奮しながら語る姿を小生はしばしばお見受けした。

先生の研究人生の前半が中等教育史だとするなら、後半は1997年に誕生した労働党政権以降の英国教育政策が主であったと言えよう。ブレア元首相の所信演説であった“Education, Education, Education”、それから「第三の道」。“Education, Education, Education”は今やもう懐かしいスピーチであるが、それまで様々な政策のうちの一つであった教育政策がまるで表舞台の主役に出たインパクトと、「第三の道」の「公と私のパートナーシップ」の言説に、先生は心を躍らせられたに違いない。その後、市場化、NPM、公私協働、ネットワーク・ガバナンスといったキーワードを切り口に、20世紀末から21世紀初頭の英国の教育政策の特質を鋭角的に解明しようとされてきた。

その初手の研究が「イギリスの「教育困難校」の再生施策にみる公教育政策の転回」であろう。これは、いわゆる教育改善推進地域（EAZ）の調査研究であった。EAZは、教育の水準・効果・環境に問題を抱える地域に集中的に教育改善を施す事業であり、1997年以降の労働党政府が標榜する「第三の道」を具現化する政策として、注目を集めた。当時、市場原理や規制緩和によって顕在化した教育課題を、公的セクターと私的セクター、ボランティア・セクターの協働によるガバナンスによって解決を図ろうとした試みであった。歴史から学んだ教育の公と私の不明瞭さが、時を経て20世紀末に多層構造組織による「思索の連結」という新たな展開をみせたことに、英国の教育研究の面白さを見出されたことだろう。

このEAZ研究は、日英教育学会の2004年の大会で取り上げられたことがある。当時事務局長だった故大田直子教授や谷川至孝教授らが、シンポジウムの登壇者としてシャロン・ゲワーツ教授（キングスカレッジ）を招聘されたのである。コメンテーターとして登壇する予定の先生は、

なぜか前日ソワソワされていた。拝察するに、ありとあらゆることに期待を膨らませていらっしやっただろう。第三の道の実証的な分析をされてきたゲワーツ教授との対話は、多くの視点が飛び交い、加えて当日の大田教授や中島千恵教授による熟練した通訳も相まって大変盛り上がり、若輩者の小生には先生方の活躍が眩しかった記憶がある。

さて、英国を愛してやまなかった先生は、2022年2月26日、仙台の地で永眠された。享年68歳であった。亡くなられる数か月前まで、これまでの研究生活の総まとめとして英国の教育政策の30年を総括したいと願われていた。叶わなかった先生のご遺志を継ぐことをここに誓いたい。

先生は、日本の教育行政や生涯学習体制への研究業績も数多く、英国だけでなくアジアの教育にも興味を持たれ、東日本大震災後には震災と教育についての研究にも従事されてきた。だが、やはり最後に戻ってきた場所は英国の教育であった。今頃、先に逝かれた尊敬する先生方や同世代の研究仲間の先生方とともに、「イギリス、どうなっていくんでしょうかね、やっぱり面白いですね」と楽しく語られているのではないだろうか。

最後に、宮腰英一先生のご冥福を、ここに謹んでお祈り申し上げます。